

2011年5月20日、

内山真吾昭島市議にイン

タビュールを行いました。



Q.内山さんのプロフィールを拝見していますと、一見政治とは縁遠そうですが政治の道を志した理由をお聞かせいただけますか？

元々、私が専門でやってきたのはスポーツです。そのスポーツが一段落ついた後に仕事を考えた時に教育を選びました。教育の道を志したのは社会における様々な問題を何か変えたいという思いとその延長線上に社会から国を変えたいと思いました。その時に何を持って国を変えられるかなと考えると政治家にはなれないだろうと、じゃあ教育だと私は思いました。教育を変えれば、社会や世の中が長期的にみて変えられるだろうと思って教育を学び、活動してきた経緯があります。そして実際に大学を出てカナダで1年間野外教育を学びました。なぜ、野外教育かと言いますと、社会を変えるという問題以前に人間教育が必要だと考えました。今の社会や学校教育の中で失われている大切なものは何かと考えた時に野外教育という手法に出会って、それを勉強しようと思って1年間カナダに渡りました。そして帰って来て自分の思いや伝え

たいことを素直に出せる場所は自分でしか作れないと思い、NPO法人を仲間と立ち上げて6年間で約300校の約2万人の子どもたちと向き合ってきました。

私のポリシーとしては、公立校がしつかりとこうしたことに取り組んで行かないといけないという思いがありました。私たちは外部の人間としてプログラムを行ってきましたが、そうではなく、もっと根本的に変えられるものがあるのではないかと。それは小中学校の枠組みの問題や地域の問題などだったりします。そういう自分の思いが野外教育から学校教育へと膨らんでいき、元々社会を変えようと思っていた気持ちと混ざり、たまたま政治という道が開けるかもしれないというところで化学反応を起こしました。それであれば、教育だけではなくもつと多角的にいろいろなものを考えた時に社会の多様な問題に対応できると感じました。そして、まずは秘書になつて政治の世界を見てみて自分ができるのかどうかを考えてみようというのが最初のきっかけでした。

Q.政治家と言いつても、国会議員や都議会議員や市議会議員と多くの選択肢があったと思うのですが、なぜ市議を選ばれたのでしょうか？

それは市政で考えた時に小中学校は市の教育委員会が管轄をしていますが、高校は都がしています。元々の専門は小中学生なので、そういうところでは自分の今までの経験を生かして昭島の教育を変えたいと考えています。そして、昭島市で一つのモデルケースを作り、それを昭島で独占するのではなく、みんなで作って他の自治体にも売り込んでいくことが出来てそれが広がっていけばそれは都議会や国会議員にも負けないのではないかと思います。

Q.今回の選挙では、震災直後、民主党に対す

る逆風、新人という難しい状況の中でもno選挙カー活動といった新しい試みもされていましたが選挙を終えての率直なご感想をお聞かせいただけますか？

民主党に対する逆風と震災もあって追い込まれたなあという気持ちはありました。選挙としては従来の選挙スタイルを変えるというよりは、NO選挙カーというのは自分が自信を持って外に提示できる考え方の一つでした。環境を大事にするというのだったら車は乗らないと。いや、必要な時は乗りますけど、選挙の道具としては使いませんし、税金を大事にします、行財政改革行います、と言っているのに税金を使って選挙をするスタイルは他の人がそれを選ぶのはやぶさかではないですが、自分にとっては許容できることではありませんでした。元々、選挙と言うもの自体が環境に良くないものです。市民の方と自分の感覚がずれていないかどうかという試みでもありました。自分の自信を持って出せる感覚が受け入れられなければ前途多難ですし、こうした新人で民主党に対する逆風や震災直後という大変な状況でそれが受け入れられたということは終わってみれば大きな自信になりました。

Q.選挙を終えられて、現在の選挙制度に対して何か疑問や問題に思っていることはありますか？

選挙カーや選挙ポスターの公費負担には一定の理解があります。そうでなければ、お金のある人しか当選できなくなってしまうからです。ただ、それは現行の選挙制度においてはということですね。今の世の中、みんな携帯やスマートフォンを一台ずつ持っている時代においてすごく古典的な制度のように感じられます。先日、読んでいた昭島市政史の本の中で50年ほど前もまったく同じように選挙カーでやっていたわけです。小林市議が選挙中プリウスを使われていましたが、それだけの

進化だけでは足りないとは思いました。私も自転車による選挙運動が正解だとは思いますが、現行の選挙制度や自分の体力を勘案した上ではあれが私の出せる一つの答えだと思います。選挙カーによる渋滞や騒音、何枚枚のビラや大量のポスターもゴミとなる選挙スタイルはどうかとは思いますが、今回は現行の制度の中で何ができるかを考えていたので、制度外のことでは何が出来たら良いなどということは考えませんでした。

Q.選挙では「子どものミカタ」をキャッチフレーズにされていましたが、これからの4年間市議として教育政策も含めてどのような政策の実現を目指しているのでしょうか？

やはり、教育問題なので実際に子どもたちを見ていますと、実は一昨日感じたことなのですが、子どもたちに求めるハードルを下げてしまうと子どもたちはそのハードルを飛ばうとするわけです。でも、そのハードルを高くすると始めは飛ばないけど、そのハードルを飛ばうと必死になるわけで、飛ばたもしくは飛ばなくとも、大人が勝手にこれぐらい飛べるだろうと作ったハードルよりは格段に高く飛べるわけです。その子供たちの可能性を伸ばせる教育政策というか社会の仕組みを作らなければいけないと思っていました、それが具体的にどういう形になっていくのかという問題になってきます。

今、教育における問題で出てくる様々なワードに学級崩壊、不登校、いじめ、中一ギャップなどがあります。小学校から中学校に上がる段階で精神的にも勉強面でも大きく出遅れてしまう子どもたちが少なからずいます。それが尾を引き、中二の中盤やそれ以降になってやっと追いつく子がいます。そしてそれを解消するのに現在、三鷹市が取り組んでいるのが小中一貫校です。そしてそれが大部分進んでいる現状にあります。先日、お話を伺った三鷹市の校長先生によれば、一貫校にす

ることで小小や小中の連携が取れ、教員の連携も進めているそうです。これは大人たちが連携してみんなで子どもたちを育てていくという考え方に基づいているわけです。小学校どうしの連携でお互いの小学生の教育をしていく、中学校に上がってからも小中の連携という三角関係が出来上がります。

行政としては、こういった制度づくりやこれにどうやって地域の方々を結び付けるかを考えるのが仕事です。その地域全体で子どもをどう育てていくのかを考えなければいけないのです。その中には、安全対策も含まれており、最近空き地や公園で遊ぶことも安全上出来なくなりつつあります。そこで、地域の方々がどう関わりを持てるかが大切になってきます。日野市の例でいえば、「プレイパーク」というケガや何をするかは自己責任ですが、犯罪から守ることやケガ人が発生した場合にすぐに救急車が呼べるような体制を作っています。こうした地域の方がボランティアで遊びを育むようなことも地域のできることの一つです。また、学校や地域が協力して子どもたちを育てていける形を作っていくことが大切だと思っています。

Q. 具体的に野外教育についてはどう取り組んでいくお積りででしょうか？

小学校にしましては自民党政権時代に小学生4年生から6年生の間に1週間以上の野外教育をさせなければいけないと決まりました。東京都内の自治体の実施状況においてはだまかに三段階に分けることができます。まったく実施していないところ、日帰りなどで実施しているところ、全面的に実施しているところの三つです。昭島市では「プロジェクトアドベンチャー」という宿泊授業が5、6年生の時にありまして、真ん中の段階にあたると思います。現在の一般的な状況としては、例えば3日間のうち冒険教育や博物館見学、お土産の購入やリング狩りなどと沢山のこと

をやるということが重要視されてきました。

しかし、私としては家族旅行でもできることをその3日間でやるというのは勿体ないと思います。それでしたら、学校だからこそできるその子どもたちに合ったプログラムを組んであげることが大事だと思います。また、同じ第一中学校に進む二つの小学校があるとすればその2校で一緒に実施すればお互い打ち解けあって中学入学時の心のハードルが下がると思います。こうした活用方法をしていけば一石二鳥にも三鳥にもなると思うのです。それに対して予算はどうするのかと言われませんが、市の予算や教育予算としては数百万円で出来ることです。ですので、そこは超党派で良いものは良い悪いものは悪いというスタンスでやっていきたいと思っています。

Q. 今回の震災では、福島原発の停止にともなう大規模な計画停電などにより電力に大きな注目が集まっておりますが、内山さんが提案される多摩グリーンバレー構想とはどのようなものか詳しく教えていただけますでしょうか？

これは私が言い出したものではなく、長島昭久代議士が総選挙の時に提言したものだと思います。元々は立川基地跡地利用の目的として昭島ではいかがですかというお話でした。ただ、私の考える多摩グリーンバレー構想といたしましてはこの立川基地跡地に固執する必要はないと思います。立川・日野・昭島の中で昭島が担う役割として原発に代わるエネルギーとして挙げられている太陽光や蓄電池などの普及を先程言った学校のように昭島市がモデルケースを作っていければと思います。昭島市のような小さな自治体ができないようなことを国が挙げてできるわけがないのでその先例を作れるような準備をしたいと考えています。

Q. 内山さんは震災直後に被災地に行かれ、ボラ

ンティア活動も経験なされたわけですが、どのようなことお感じになりましたか？

私は現地で泥かきをしてきただけですので、特に視察などをしてきたわけではありません。ただ、一つ思ったことは自分の専門が教育なのでそう感じたのですが、私が今まで子どもたちに教えてきた助け合いやコミュニケーションやその場の判断など、そういったものが大事になってくると思いました。それと経験のもとから言いますと、すごく簡単な言い方になってしまいますがこの未曾有の困難にも負けない強い人間づくり。そして事後的なことです。東京にいる私たちなどが積極的にヒト・モノ・カネを現地に供給し続けるといったお互いを支え合う精神を持つことがすごく重要だと思います。

Q.もし関東一帯で地震が発生した場合に昭島市が事後的に行う防災対策などはありますでしょうか？

事前的なものとしては防災協定があります。昭島市と同規模の自治体と結んでおりまして、昭島が被災した場合には協定先を避難場所として提供してもらうことや救援物資を送ってもらうことになっています。逆もしかりです。そういった協定自治体が群馬県にひとつあります。これを一つのみならず、もっと増やすことによってリスク分散をしていかなければいけないと考えています。

